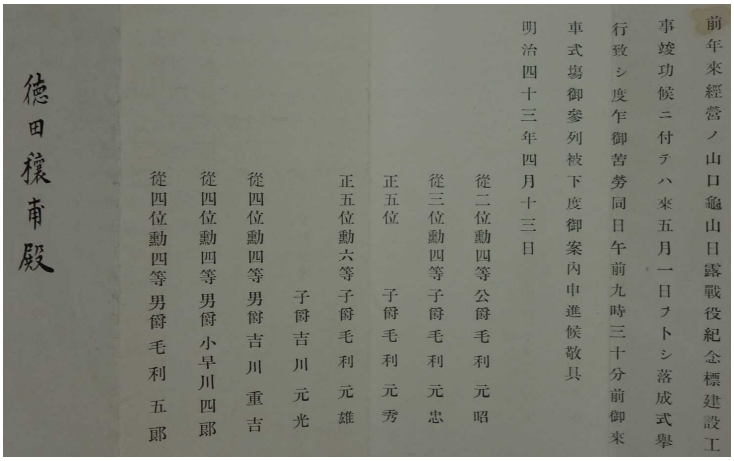
〈2022.6.16　改訂版〉

「集まる・集める」をさがしてみた！

今月の資料小展示では、
第17回中国四国地区アーカイブズウイークの当館企画「集まる・集める　人、モノ、記録・記憶と文書館資料」に連動して、館蔵資料にひそむ「集まる」「集める」をさがしてみました。
写真資料を手元に置いて、写真が撮影された理由を推測したり、文書記録の簿冊をめくって、文字の向こうのできごとに思いをはせたり・・・・・。
すると、さまざまな「集まる」「集める」をみつけることができます。
資料が発するメッセージにわけいってみましょう。

《人が集まる・人を集める》


前年來經營ノ山口龜山日露戰役紀念標建設工事竣功候ニ付テハ來五月一日フトシ落成式擧行致シ度午御苦勞同日午前九時三十分前御來車式場御參列被下度御案内申進候敬具
明治四十三年四月十三日
從二位勳四等公爵毛利元昭
從三位勳四等子爵毛利元忠
正五位　子爵毛利元秀
正五位勳六等子爵毛利元雄
子爵吉川元光
從四位勳四等男爵吉川重吉
從四位勳四等男爵小早川四郎
從四位勳四等男爵毛利五郎
徳田穰甫殿

■写真Ａ
日露戦役紀念標（砲台）落成式招待状
【明治43年4月】
〈山口市阿知須・徳田家文書81〉

■写真Ｂ
錦座
「岩国名勝写真帖」【大正14年】より
〈行政資料20市町-2（21）〉

１．《県会議事堂に　「集まる・集める」　》

「広ク会議ヲ興シ万機公論ニ決スヘシ」。五箇条の御誓文のこの一節は、明治新政府が議会制度を遠望していたことをものがたっています。

大蔵卿井上馨の号令により、明治６年（1873）４月、地方長官を東京に招集して開かれた「地方官会同」は、地租改正断行を周知するためのセレモニーでした。しかし、一方で、地方行政遂行上の課題を議題として持ち寄ることが呼びかけられたことも知られており、行政上の「地方緊要」の問題解決のために、「話し合い」や「議論」の場がもたれることを強く印象づけたのです。事実、この「地方官会同」開催をきっかけに、各府県における「地方民会」設置の機運が高まることになったと言われています。

山口県では、明治6年10月に、当時、民政の最前線にあった区長や戸長らを議員とする「地方民会」が招集されました。これは、全国的にみても、地方民会招集の非常に早い事例です。ただし、当初は県令を議長としており、この「民会」は、あくまでも、県令の諮問機関との位置づけでした。

この会議は、のちに、「府県会規則」のもとで編成された「県会」と区別するために、「県庁大会議」の名称で紹介されています（戦前の県史編纂事業で用いられた「県庁大会議」の名称が、平成の県史編纂事業でも採用されました）。県庁大会議は、その後、明治９年10月までの間、計5回開催されました。その間、「議案の事前告知」、「多数決制度の採用」など、議会としての仕組みが徐々に整えられいくことになりました（なお、明治8年11月開催の第4回会議から「県会」の名称が用いられ始めています【写真①／県史編纂所史料2156】）。

第一回の県会が開かれたのは明治12年３月のこと。このとき県会議事堂が新築されました（仮称「明治議事堂」、大正５年〈1916〉11月の通常県会からは、その舞台は大正の新議事堂〈重要文化財〉に移されました）。

議員による議論が沸騰しただけでなく、議場には傍聴席や記者席も設けられており、県政に対する興味関心が交錯する場所でもありました。議事堂は、県会以外にも、さままざまな講習会や展覧会が開かれる場所でした（議事堂を背景にした記念写真を数多く確認できます【写真②「地方改良事業講習会」周南市戸田・劔持家文書609】【写真③「自治資料展覧会」写真資料・県庁内務部174】）。

▲明治議事堂議場内部〈下関市・富田家文書１〉　【撮影年不明】

2.《集まる＝団結する（毛利家をなかだちにした近代山口の団結）》

明治10年代、全国各地で、憲法制定や国会開設を要求する自由民権運動の炎が燃えさかりました。県下での運動は過激な展開を見せることはなく穏やかであったことから、「低調であった」との評価が下されることが多いようです。いわゆる民権結社のように、その主張を旗幟鮮明に掲げて強烈な政治色を帯びた活動をみせることはなかったものの、同じ理念のもと、結社の簇生がみられました。

「勤王党」は維新をかけぬけた諸隊隊士により明治15年（1882）に結成されました。その趣意書には「政府の公布条例（＝集会条例）を尊守」することや、「皇室を奉戴」することがうたわれています。その後、開墾社と改称、厚狭郡の瀬戸内海沿岸部での石炭採掘と塩田経営による士族授産に注力する実業結社へとシフトチェンジしたようです。

「忠告社」は明治14年に結成されました。その趣意書や社則には、文明開化のもたらした軽躁浮薄な世相に警鐘を鳴らし、「防長二州ノ人」として「先公ノ意志ヲ奉シ先哲ノ誠忠ヲ継カント欲スル」とあります。国家や中央を対局に置くことで、近代国家における「防長独自のありかた」として、「忠正公（毛利敬親）の誠意」をよりどころとする団結が肝要であることが述べられています【写真④／神奈川県・内藤家文書307】。

どちらの結社についても、反民権の結社として位置づけられているものの、その活動の実態を詳らかにする記録は残されていません。明治国家を激しく敵対視するのではなく、中央集権国家としての「大きなあり方」を受け容れつつ、一方で、防長の風土に見合った独自の「社会の枠組み」の形成が意識されていたように思われます。

このような世界観を描くことを可能にしたのが、近世以来の、毛利家と防長の人民（山口県民）との絆であったものと思われます。それは、近代における「御恩と奉公」とも言える関係性だったのかもしれません。こうした関係性を念頭に置いて近代山口のできごとを照射してみると、毛利家をながだちにして「近代の防長」というコスモロジーができあがっていたことに気がつきます。

明治17年10月に創設された防長教育会、その資金寄付を募った勧誘文（「設立趣意書」）は毛利本家分家の当主の連名で作成されています。設立基金の募集にあたっては毛利本家元徳の名代として世嗣元昭、徳山毛利家当主元功、岩国吉川家当主重吉が県下を巡回しています。

日清戦争のさなか、明治27年、毛利家宗家分家からの出資により「微誠会」が組織され、戦時戦後の慰問活動のみならず、後援活動として、軍人家族救恤〈＝救済〉の様々な手立てが講じられています。

明治33年4月の亀山銅像除幕式、明治43年（1910）5月の「日露戦役紀念標（＝亀山砲台）」竣功記念式典 【シート写真Ａ】 も、毛利家宗家当主・各分家当主の連名で招待状等が発行されています。

一方で、昭和初年の天皇即位御大典記念として建設された、防長先賢堂（昭和3年〈1928〉12月竣功）の敷地は毛利家から山口県に寄贈されたものです。昭和10年10月竣功の山口県綜合運動競技場（県設グラウンド、現山口中央高等学校の敷地）は敷地・施設ともに、古稀記念として公爵毛利元昭から山口県に寄贈されたものでした。

このような事実からも、毛利家と防長二州人民の深い絆をうかがうことができます。

３．《集まる＝団結する（壮行会の風景）》

団結を深める。「壮行式」や「結団式」のもたらすマインドです。

【写真⑤】は長門市深川小学校生徒の「満蒙開拓青少年義勇隊山口中隊入隊壮行」の記念写真です（防府市・山野家文書100）。

昭和12年（1937）、近衛文麿内閣に提出された「満蒙開拓青少年義勇軍編成に関する建白書」を受けて作成された「満州青年移民実施要項」に基づいて16歳～19歳の青少年が満州国に開拓民として送出されました。将来的には、満洲エリアと国境を接するソ連に対する国防の意味合いが秘められていることは明らかでした。志願が基本でしたが、やがて高等小学校の上位成績者が中心となって構成されていくようになったため、学校側でも数多くの義勇軍兵士の輩出を目論むようになり、最終的には、各学校への人数割り当ても行われるようになりました。知らず知らずのうちに教育の世界が戦争の時代の高揚感に包み込まれていたのです。

４．《集まる＝整然と並ぶ》

【写真⑥】は昭和9年（1934）10月の創立記念式典にあわせて刊行された『（山口県師範学校）創立六十年史』（文書館図書376）の巻頭に掲載された師範学校生徒の整列写真です。

師範学校は、教員養成の専門教育機関でしたが、「防長精神の発露による皇国教育の推進」を教育目標に掲げていました。背筋を伸ばして胸を張って整列している学生のたたずまいからは、教育に向けられた「まっすぐな」情熱をうかがうことができます。

５．《集まる＝並ぶ＝記念撮影》

【展示資料①】は「国勢調査紀念写真」（周南市戸田・劔持家文書604）です。

大正９年（1920）10月１日、第一回国勢調査が実施されました。「社会を数量的に把握すること」は、近代における「一等国」の必須条件とされていました。実務に携わった調査員には、①市町村議員②小学校教員③学務委員④衛生組合長⑤在郷軍人会員名⑥名望学識ある篤志、など、地域の「上流人士」が任命されました。徳山周辺の国勢調査調査員による記念写真です。撮影場所は不明ですが、明治中期以降、周防宮市で活動した写真師渡邊五州により撮影されたものです。

６．《集まる＝にぎわう＝劇場や映画館》

芝居や浄瑠璃には、見物人が集まり「にぎわい」がもたらされました。

【写真⑦／宇部市・田中栄一収集文書231】は、山口市中河原（現、山口市一の坂交通交流広場）にあった山口座の内観写真です。劇場の舞台や桟敷の様子が撮されています。この場所は、かつての大野毛利の屋敷地にあたります。明治末年の山口町の地図や、興業に関連する資料によると、この場所にあったのは永楽座でした。しかし、大正末期の地図には、同じ場所に「山口座」と記されています。永楽座と山口座の関連を判断できる記録は見いだせていません。

【展示資料②／山口市・河野家文書513】は、明治38年（1905）10月に永楽座で開かれた「山口育児院慈善演芸大会」の趣意書とプログラムです。寄附により孤児院の運営資金を得るため、各地で慈善演芸会が開かれました。

【シート写真Ｂ】は、岩国椎尾広小路にあった劇場錦座の写真（大正13年新築）です。「県内第一」とうたわれた千鳥破風の豪壮な和風建築で、昭和初期に製作された鳥瞰図「岩国名所図会」（金子常光画／山口市・雨村家文書65）にも椎尾神社参道に面した、まちなかの衢（ちまた）に描かれています。

《モノを集める　百花繚乱！博覧会の世界》

■近代日本の産業振興策　「博覧会」「共進会」　について

博覧会や共進会の第一義は、国内各地の物産を一堂に集めることにありました。観覧に供することにより優劣を競う、そして、生産者や販売者の向上心を刺激して、品質改良や産業振興を図ることに目的がありました。

つまりは、明治政府が主導した産業振興政策のひとつなのですが、「もの」を集めることにより、「くらべる」「きそう」こと、今日風に言えば、「ライバル心をたきつける」とか「モチベーションを高める」、というような心理的な効果をねらったものでした。したがって、明治国家にとっての金科玉条的なスローガンであた「富国強兵・殖産興業」政策の達成や浸透の具合を推し測るためのバロメーターとも言えるイベントでした。

共進会は「見本市」のような色彩が濃く、「生糸」「織物」「製茶」「畜産改良」「林産」「水産」などさまざまなテーマが掲げられ、中央官庁や府県、各種産業団体の主催により国内各地で開催されていました。内務省主催により、明治12年（1879）に横浜で開かれた「製茶共進会」が国内最初の共進会とされます。明治12年5月19日の大蔵省布達甲第50号には、「共進会は、平素各人の産製する同種の物品を一場に蒐列し製産人の勉否製産品の優劣を照合審査公定し乃ち邦家に益する優等のものを褒賞し他の一般をして相共に益其業務を競ひ其製産品を精且大ならしむるにあるなり」とあります。

一方、国内の産業発展を促すだけではなく、魅力ある輸出品の育成を目的として、政府主導で大がかりに開催されたのが「内国勧業博覧会」でした。大久保利通の意向で「内国」を冠したと伝えられます。対外的に国力の充実をアピールする意味合いも含まれていました。

明治期を通じて、東京上野で３回、京都・大阪で各１回開催されたのですが、回を重ねるごとに、次第に「はなやか」とか「ものめずらしい」にウエイトが置かれはじめ、最終的には、博覧会入場者がもたらす経済効果が注目を浴びるようになりました。産業振興という「求道的」な部分の色合いが薄まり、娯楽的要素が前面に押し出されたイベントへと変質していきました。「噴水」「エレベーター」「高塔」「ウオーターシュート」など珍奇な構造物が評判を呼ぶことになっていきました。

内国勧業博覧会は、近代国家にとって祝祭的なイベントであったと捉えることも可能です。物見遊山の象徴的なイベントになり、それは、近世の社寺参詣のブームと軌を一にするものであったと理解することができそうです。そして、大正以降の大衆的な旅行ブームの火付け役になったイベントとも言えるようです。

「もの」を集め、そこに「ひと」が集まることにより「にぎわい」が生み出されたのです。
次に掲げる表は、明治以降に開催された博覧会と当館所蔵資料のかかわりを示した一覧です。

《１．第一回内国勧業博覧会（明治10年〈1877〉開催）にまつわる館蔵資料》

■第一回内国勧業博覧会■

開催地：東京上野公園　　開催期間：8月21日～11月30日

入場者：454,168人　　出品点数：84,353点

内務卿大久保利通の発案で内務省主導で開催された国内最初の博覧会です。殖産興業推進をテーマに掲げ、欧米の新技術の紹介と日本の在来技術の再確認に重きが置かれた産業奨励会として企画されました。会場には、美術館・機械館・園芸館・農業館など6つの展示館が建設されています。大時計、風車、噴水、そして、会場内に大量に掲げられた提灯が世間の評判を呼んだ。

■関連館蔵資料■

「山口県各郡物産解説　周防編・長門」　〔県庁戦前Ａ総務1690・1691〕

県内各地の農産品・林産品・水産品・畜産品・醸造品・窯業品・工業品など約300点について、それぞれの産地・製造場・製造法などがまとめられています。明治10年（1877）、県庁国史掛が作成した記録であり、明治初期の県下の「名産品カタログ」とも言えます。作成年から、東京上野で開催された第一回内国勧業博覧会への出品をセレクトするための参考資料であったと推測できます。この記録により、県下における、江戸時代以来の物産を概観できます。今日的ないわゆる「特産品」や「伝統工芸品」の原風景をそこにみることができます。産出量（たくさん）や産額（高い）ではなく、「ほかの場所では見られない（珍しい）」に、セレクトの基準が置かれていたように感じられます。

《２．第二回内国勧業博覧会（明治14年〈1881〉開催）にまつわる館蔵資料》

■第二回内国勧業博覧会■

開催地：東京上野公園　　開催期間：3月1日～6月30日

入場者：823,094人　　出品点数：331,166点

内務省と大蔵省の共催。西南戦争を契機としたインフレーションにより、停滞気味であった勧業政策の再起動を意図して企画された博覧会でした。

会場表門両脇の「鶴の噴水」と美術館前の「猩々の噴水」が評判を呼びました。

中央の煉瓦造の展示館は、上野公園の寛永寺本坊跡に、お雇い外国人イギリス人ジョサイアコンドルの設計で建設されました。のちに上野博物館本館に転用され、関東大震災の被害により取り壊された建物です。

美術館前には、猩々が背負った瓶から水が噴き上がるしかけになっていました。日本伝統の「からくり」仕掛けで組み立てられたとされます。

■関連館蔵資料■

【展示資料③】　「第二回内国勧業博覧会場図」〔萩市高洲家文書389〕・・・・・シート末尾

画工兼出版人は東京神田区錦町清水嘉兵衛。江戸時代の名所図会を彷彿とさせる仕上がりです。

《３．第三回内国勧業博覧会（明治23年〈1890〉開催）にまつわる館蔵資料》

■第三回内国勧業博覧会■

開催地：東京上野公園　　開催期間：4月1日～7月31日

入場者：1,023,693人　　出品点数：167,016点

当初「亜細亜大博覧会」と銘打って、海外からの出品を含めた国際博覧会が計画されましたが、最終的には、内国博覧会として東京で開催されることになったものです。３回目の博覧会であり、「にぎわい」の演出や博覧会の運営にも「なれ」が見られるようになってきました。「ランカイ屋」と呼ばれるイベンターが活躍するようになってきました。

上野の会場には、本館・美術館・農林館・動物館・水族館・機械館・参考館の７館が建設されました。展示品として、金色の皿やコーヒー茶碗などの洋食器、マネキン人形が評判を博したのに加えて、会場内で運行された「アメリカ・スプレーグ式電車」が評判を呼びました。これは、東京電灯技師長の藤岡市助（岩国出身）により、日本で最初に運転された電車として知られています。

■関連館蔵資料■

【写真⑧】「第三回内国勧業博覧会　独案内」〔周防大島蒲野・佐川家文書1170〕

東京市日本橋区本石町文栄堂出版の博覧会場のガイドブックで、東京案内が附録としてつけられました。会場案内図（「第三回内国勧業博覧会独案内明細図」〈銅版〉）」も添えられていました。ほかにも、『会場の栞』『会場道志るべ』などの類書が刊行されました。

４．第四回内国勧業博覧会（明治28年〈1895〉開催）にまつわる館蔵資料》

■第四回内国勧業博覧会■

開催地：京都市岡崎公園　　開催期間：4月1日～7月31日

入場者：1,136,695人　　出品点数：169,098点

当初、明治27年に東京で開催される予定でした。しかし、前年明治26年のシカゴ万博への日本政府による出品計画があったことから、いったんは明治29年に延期開催の方向で計画が進められていました。しかし、「平安遷都1100年」の祝祭を模索していた京都市からの強い要望により、明治28年、京都での繰り上げ開催が決定されました。開催直前に日清戦争が開戦されましたが、産業振興による国力増強政策として博覧会は予定通り開催されたのです。

平安神宮大極殿の復元、国内最初の市街電車（京都駅前から博覧会場までの京都電気鉄道）の運行、黒田清輝による裸体画の展示、など産業振興とは別の話題が沸騰した博覧会でした。

会場内には、国内最初の本格的な水族館が設けられ、来場者からの好評を博しました。この時、兵庫和田岬（遊園地和楽園）に設けられた水族館別会場は、その後、本格的な水族館として整備され、明治30年の農商務省による「第二回大日本水産博覧会」の主会場となりました。

博覧会跡地には平安神宮や文化施設（府立図書館など）が建設され、明治37年に岡崎公園として開園、都市の歴史の記憶の刻まれた場所として、今日まで受け継がれています。

■関連館蔵資料■

▼【展示資料④】

衆議院議員梶山鼎介「第四回内国勧業博覧会」観覧優待券　〔下関市・梶山家文書731〕

▼【写真⑨】

「第四回内国勧業博覧会　山口県関係受賞人名録」〔阿武郡阿武町・上村家文書643〕

■博覧会に　「出品」する「陳列」する「受賞」する　ということ

博覧会や共進会への出品、行幸啓の際の展覧や台覧。「受賞」や「お買い上げ」によって、陳列された物産や発明品は高い名声を得ることになりました。防長米や柏木検温器はその代表例です（以下に柏木検温器〈水銀体温計〉の受賞歴を掲げておきます）。受賞を繰り返して名声を博することは、生産に関するより一層の工夫や、技術的な改良をもたらしました。一方で、伝統や由緒も強調されることになりました。

―柏木検温器の受賞歴―

○明治23年「第三回内国勧業博覧会」（有効三等賞牌）○明治28年「第四回内国勧業博覧会」（有効二等賞牌）
○明治36年「第五回内国勧業博覧会」（二等賞牌）○明治43年「関西府県聯合共進会」（一等金牌）
○明治43年「名古屋開府記念共進会」（有効金牌）○明治44年「ドイツ万国衛生博覧会」（紀念章牌）
○大正元年「中国六県製品共進会」（一等賞金牌）○大正３年「東京大正博覧会」（金牌）

５．第五回内国勧業博覧会（明治36年〈1903〉開催）にまつわる館蔵資料》

■第五回内国勧業博覧会■

開催地：大阪市天王寺今宮　　開催期間：3月1日～7月31日
入場者：4,350,693人　　出品点数：31,064点

当初、明治32年の開催が計画されていたのですが、明治33年のパリ万博、明治34年の英国グラスゴー万博への参加準備のために、開催が明治36年に先送りされていたものです。この博覧会には、海外14か国18地域からの参加があり、事実上万国博覧会と見なすことのできるものでした。

会場内には、「農業」「林業」「水産」「工業」「機械」「美術」など展示館が10棟設けられたほか、英独米仏露など外国物産展示のための参考館も置かれました。

なお、第四回内国勧業博覧会に続いて、水族館が第二会場の堺に設置され、博覧会終了後にも、本格的な水族館として市民生活の憩いの場として存在し続けたのです。博覧会がもたらした新たな生活文化の一面でした。

なお、会場外の余興として「学術人類館」が営業される一幕もありました。アイヌ、インドなどの諸民族のありのままの生活を見せるというコンセプトでした。このような「物珍しさをのぞき見る」ような目線は、当時国内で数多く出版されていた、台湾・中国・朝鮮を紹介した写真集でも通底するものです。

この博覧会は、内国博覧会史上最多の観客動員を記録しますが。それを支えたのは、娯楽的な要素でした。会場内全館にイルミネーションが点灯され、夜間開館が実施されました。そして、大きな評判を呼んだのが、ウオーターシュートやエレベーター、メーリーゴーランドなど舶来の娯楽施設でした。

なかでも会場内の美術館後方につくられた「大林高塔（望遠楼）」は、大阪初のエレベーターでした。エレベーターに乗って到達した45メートルの高さから得ることのできる大阪の大パノラマは市民からの人気を博したのでした。

この博覧会の敷地造成や会場建設を請け負ったのが、大林組の創設者大林芳五郎でした。大林高塔は大林組にとってのモニュメンタルな建造物だったのです。

なお、博覧会跡地は「天王寺公園」と「新世界」として生まれ変わりました。新世界は、通天閣とルナパークを擁する繁華街として大阪を象徴するスポットへと変貌を遂げました。これは、博覧会がうみだしたワンダーランドの新たな姿だったのです。

■関連館蔵資料■

この博覧会に関しては、何種類もの会場案内図が作成されています。

▼【展示資料⑤】平生町佐川家文書3702・・・・・・シート末尾
▼【写真⑩⑪】千葉県津田家文書642

《館蔵資料に見る「集まる」「集める」　アラカルト１》

◈扇形車庫・・・・・機関車が「集まった」場所

「操車場落成記念写真帖」三村家文書29

鉄道のターミナル駅には、蒸気機関車の点検整備格納のために「機関庫」と呼ばれる車庫が設けられました。「機関庫」は、単純に施設設備だけのことを指し示すのではなく、そこに従事する職員や組織まで含めた呼称でもありました。そして、そこに、機関車の方向転換のために設けらていたのが「転車台（ターンテーブル）」、転車台の先に放射状に延ばされたレールを受けとめて機関車を格納する車庫が設けられました。俯瞰するとその形状が扇形にみえることから「扇形車庫（せんけいしゃこ）」と呼ばれて、代表的な鉄道関連施設として親しまれてきました。

写真は、大分県の大分停車場構内に設けられた扇形車庫の竣功時（大正元年〈1912年〉12月）の姿を写したものです。国内各地をかけめぐり、日本の近代化を牽引した蒸気機関車が集まる場所でした。

全国的に知られているのが、京都の梅小路機関庫（重要文化財、京都鉄道博物館の構内）や大分県玖珠町の豊後森機関庫（登録有形文化財）、岡山県の旧津山扇形機関車庫（津山まなびの鉄道館）などです。

県内でも、「SLやまぐち号」運行のため、新山口駅（旧小郡駅）に転車台が残されています（山陽新幹線東京方面、新山口駅発車直後、左手車窓から転車台と扇形庫〈屋根ほか外構撤去〉の全景をとらえることができます）。

《館蔵資料に見る「集まる」「集める」　アラカルト２》

◈図書館・・・・・本を「集める」人が「集まる」・・・・・知のオアシス

図書館は、本が集められる場所であり、そして、知を求めて人々が集まる場所でもありました。

明治29年（1896)、「帝国図書館設立の建議案」が国会で可決され、翌年、帝国図書館が設立されました。初代館長に任命されたのは、岩国出身の図書館学者で欧米の視察経験のあった田中稲城でした。

帝国図書館の設立は、国内各地での図書館設立の機運を高め、県内でも、明治30年代になると、さまざまな形態での図書館設立の動きが活発になりました。

■県立山口図書館

▲「〔県印刷事業〕創立十週年　記念写真帖」大正2年（1913）刊行〈一般郷土史料B78〉より

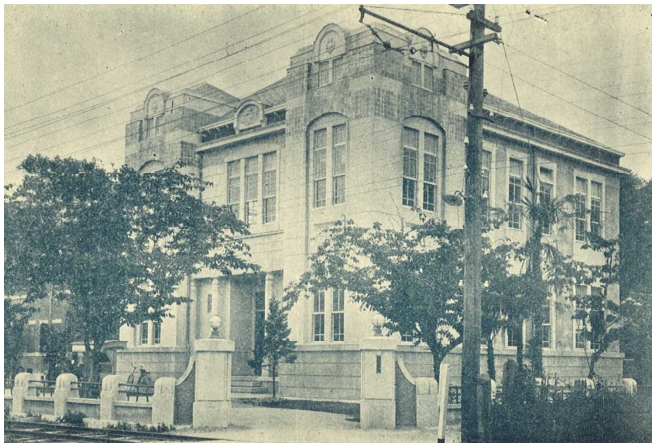
明治36年（1903）7月、阿武郡立図書館（明治34年1月開館)、私立児玉文庫（明治36年1月開館）に続いて、県内で三番目に開館した図書館でした。郡長坂本協らにより、吉敷郡立図書館の設立構想が先行していましたが、最終的には県立図書館として山口中河原の地に建設されたものです。当時の山口県知事武田千代三郎の前任地秋田県でも県立図書館長を務めていた佐野友三郎が初代館長に就任。巡回書庫の導入、夜間開館など、積極的な図書館運営で高名でした。

■私立図書館

明治34年1月、萩中学校内に阿武郡立図書館が開館します。名称こそ郡立ですが、その実態は、阿武郡域の素封家である滝口吉良・菊屋剛十郎らの寄附で設立されたものでした。

滝口は、出身地明木の村立図書館設立にも大きく関与しています（明治39年11月)。村立明木尋常高等小学校内に開設されたものです（昭和3年に建てられた二代目の図書館は、昭和34年に解体移築されて、下横瀬公民館として現存します〈国登録有形文化財〉)。司書伊藤新一による積極的な図書館経営で知られていました。

本を「集める」ための工夫、それによって「集められた」ものを知らしめる工夫、そして「集められた」知識を求める意欲、こうしたいろいろなベクトルがクロスした「知の拠点」であることこそが図書館の大切な機能でした。図書館を舞台にしたさまざまな「集まる」が醸し出す雰囲気が、豊かで潤いのある日々の暮らしをうみだすことへとつながっていたのです。



▲『磯崎拾玉』（前篇『華南雙英』） より
〈文書館図書289オ〉

▲「岩国名勝写真帖」【大正14年】より
〈行政資料20市町-2（21）〉

写真左上は、明治37年（1904）、地元出身の素封家尾中郁太の寄附により、村立華南尋常高等小学校に開かれた村立図書館（県下で最初に小学校内に設けられた図書館）です。尾中郁太は、弟諦治の日露戦争での戦死をきっかけに、恩賜金と自らの蔵書を「集めて」、出身地中関に知の拠点を創り上げたのです。こちらの経営には、司書香川政一があたりました。

明木図書館も華南図書館も、村立でありながらも、私立図書館としての色彩の濃いものでした。

写真右上は岩国図書館です。明治期に岩国小学校の附属図書館として誕生、大正12年（1923）に新築されたのが写真の建物です。帝国図書館長田中稲城、県立山口図書館長佐野友三郎による指導のもと、県土木技手岩崎延雄が設計にあたった本格的な図書館建築でした。建設経費や図書購入費は、岩国町への吉川家からの寄附により充当されました。旧領主が創出した知の拠点と言えます。そのためか、図書館内の南陽文庫には吉川家の什器が陳列格納されていました。知の象徴としての本の集積以外にも、図書館の「集まる」「集める」には、顕彰の意味合いもほのかに含まれていたことをうかがわせます。

明治36年開庫の児玉文庫（写真下左〈「防長名蹟」文書館図書290〉）や大正11年開庫の桜圃寺内文庫（写真下右〈雨村家文書340〉は朝鮮景福宮を移築したと伝えられる「朝鮮館」）にみられる「集まる」「集める」についても、その意味合いについて、冷静に考えてみる必要があるようです。

児玉源太郎や寺内正毅が抱いていた郷土への思い（後進の育成と文化の充実）をまっすぐに理解する前に、両者が軍人であったがゆえに、「集める」という行為の本質が、植民地としての台湾や朝鮮からの「収奪」というイメージによって見えにくくなってしまっていることについて、少し冷静に考えてみる必要があるようです。

【展示資料③】　「第二回内国勧業博覧会場図」〔萩市高洲家文書389〕・・・・・シート末尾

【展示資料⑤】平生町佐川家文書3702